

第2章 計画地の環境

1. 自然的環境

(1) 西東京市の位置と立地

西東京市は、平成 13 (2001) 年 1 月 21 日、田無市と保谷市が合併して誕生した市で、武蔵野台地のほぼ中央に位置しています。北は埼玉県新座市、南は武蔵野市及び小金井市、東は練馬区、西は小平市及び東久留米市に接しており、東西 4.8 km、南北 5.6 km で面積は 15.75 km² です。

東西に横断する主要幹線道路や鉄道路線により都心へのアクセスが良好であり、早くから東京の住宅都市として発展してきました。

市の南東部に位置する下野谷遺跡の最寄り駅は西武新宿線東伏見駅であり、新宿から約 30 分で訪れることができ、都心からのアクセスは良好です。



図 6 西東京市の位置

(2) 下野谷遺跡の位置と立地

下野谷遺跡は、東京都西東京市東伏見二丁目、三丁目、六丁目に所在し、遺跡の東側は練馬区と接し、遺跡の東端からは南に約 250m で武蔵野市に接します。

石神井川の上流部の南岸の台地上から低地部にかけて立地しており、遺構や遺物が多く出土する遺跡の主要地域は、地形区分で武蔵野面と呼ばれる台地上にあります。

主要部が立地する台地は、東西約 500m 南北約 300m であり、周辺地域では稀な広く独立した、見晴らしも日当たりも良い場所です。この台地は、西側が市立東伏見小学校のある低位面へと下るやや急勾配な坂、東側が練馬区との市境にある練馬区立武蔵関公園へ下る緩やかな坂、北側が

石神井川の崖線で区切られます。南側は、現在、青梅街道に向かって緩やかに下降していますが、これは道路築造の影響もあるようで、本来は下野谷遺跡公園の南が最も標高が高い58mとなります。下野谷遺跡の範囲は、石神井川を望む台地の全域に西側の低地部を加えた範囲で、東西約750m、南北約300mの約134,000㎡にも及びます。

史跡下野谷遺跡は、この台地を刻む小谷で区切られた西側台地上に立地しています。

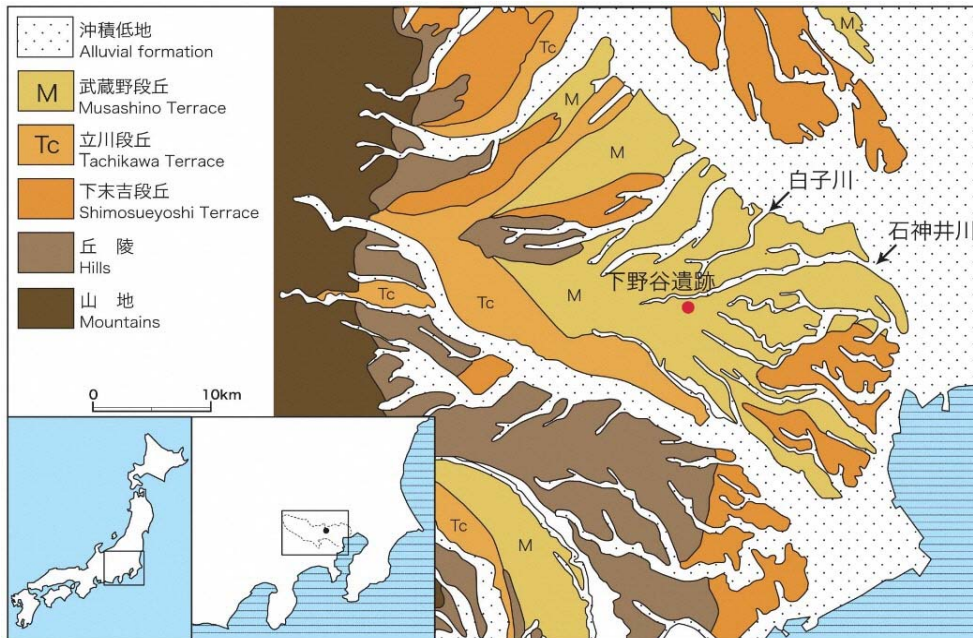


図 7 武蔵野台地の地形と下野谷遺跡の位置

出典：『国史跡下野谷遺跡（リーフレット）』第4版

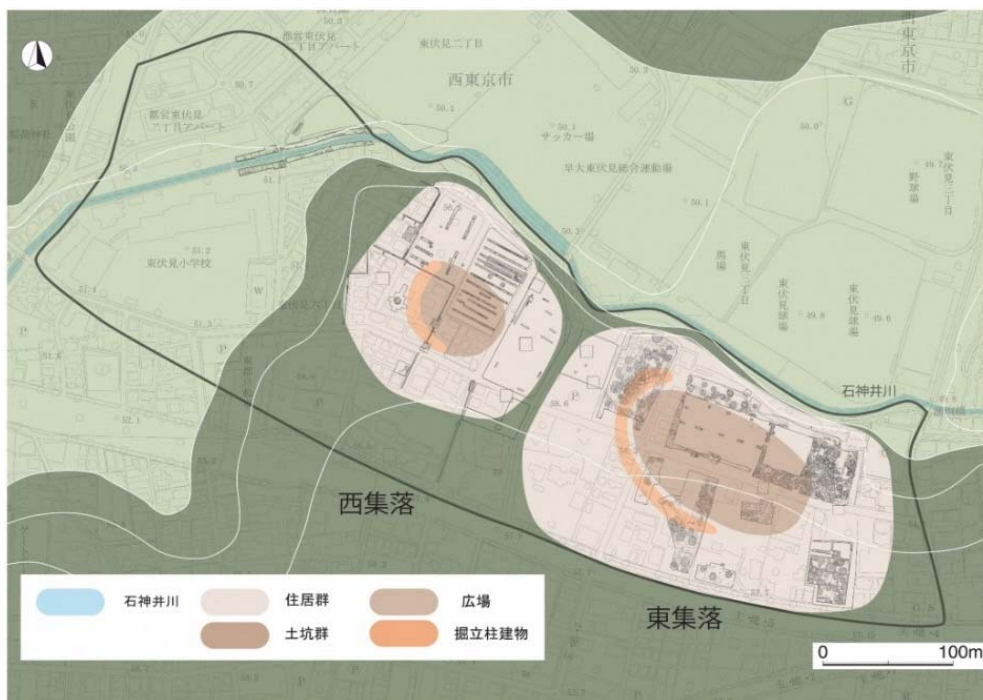


図 8 下野谷遺跡全体図

2. 歴史的環境

(1) 下野谷遺跡の歴史的環境

下野谷遺跡は旧石器時代から人々の活動の痕跡の残る複合遺跡です。

旧石器時代は約 30,000 年前の地層から剥片製の石器が出土しており、約 27,000 年前の最寒冷期には、石器を製作した跡と石蒸し料理などが機能として想定されている礫群*が多数見つかっており、季節などによって移動を繰り返す生活をしていたと考えられる人々がたびたび訪れる場所だったと想定されています。

縄文時代には、早期と中期を中心に生活痕跡が確認されています。

早期には、屋外炉とも考えられる多数の炉穴が発見されており、台地上に広く人々の活動の痕跡が読み取れるようになりますが、前期の遺構*は発見されておらず、遺物*が崖線寄りで見られるのみです。

中期は、下野谷遺跡を最も特徴付ける時代であり、遺跡の主要部となる東西 500m南北 300mに及ぶ台地上では、ほぼ全域から遺構・遺物*が出土しています。2つ以上の環状集落を形成していると考えられ、堅穴住居*、掘立柱建物*、土坑*、ピット*など多数の遺構が見つかっています。


縄文時代中期末から後期になると、これらの集落は急速に衰退していき、後期初頭には、住居跡が一軒しか検出されておらず、下野谷遺跡の縄文集落の終焉と考えられます。

弥生時代から中世初頭にいたっては、下野谷遺跡における人々の活動の痕跡はほとんどありませんが、対岸の下柳沢遺跡では、中世の埋葬に関係すると考えられている地下式墳*が 50 基以上、群をなして検出されています。

鎌倉時代末期から室町時代初頭には、西東京市域でも、富士見池周辺を始め、北に位置する白子川流域や市域中央の白子川の源流域の一つである谷戸地域などに初期村落があったと考えられます。

近世には上保谷村、下保谷村、田無村など明確な村落組織がみられます。下野谷遺跡周辺は上保谷村に属し、街道の跡や畑の畝跡が見つかっています。この辺りでは、ホテルの舞うのどかな風景が昭和初期まで見られました。

下野谷遺跡の一部や対岸など、石神井川に沿った広い低地を開発して田が作られていました。

30000 年前	旧石器時代	立川ロームIX層から石器が出土。
27000 年前		石器を作った跡や石蒸し料理の跡(礫群)多数 旧石器時代をとおして、たびたび利用されていた。
13000 年前	縄文時代	
9000 年前		
6000 年前		環状集落 したのやムラ
5000 年前		
4000 年前	晩期	
2300 年前 紀元前 紀元後	弥生時代	<以後、中世まで武蔵野の原野(あし原や林)が広がる。>
2 世紀頃	古墳・中世	
14 世紀頃		対岸の下柳沢遺跡(しもやぎざわいせき)に地下式墳(ちかしきこう) = お墓?多数 上保谷村ができる。
16 世紀末 1600 年	近世(江戸)	低地部に田畑の跡 田畑として開拓される。
1868 年	近代(明治・大正・昭和・平成)	
1889 年		保谷村ができる。
1943 年		中島飛行機武蔵製作所の 工場寮ができる。 第二次世界大戦終結
1945 年		保谷市ができる。
1967 年		下野谷遺跡 第 1 次調査
1973 年		田無市と合併し西東京市となる。
2001 年		遺跡公園ができる。
2007 年	下野谷遺跡 第 22 次調査	
2011 年	国史跡に指定される。	
2015 年		

*年表の長さは、時間の長さとは異なります。

図 9 下野谷遺跡の歴史年表

当時、市内には水田が少なく、この地域の「田」は珍しい存在であったといえます。対岸の下柳沢遺跡では、石神井川から田へ水を引く水車も発見されています。

下野谷遺跡は、近代の戦争に関連する遺跡としても重要です。第2次世界大戦時には、下野谷遺跡の南隣の武蔵野市にあった中島飛行機武蔵製作所の工員寮などの付属施設が下野谷遺跡の範囲内に建ち、工場を標的とした空襲の余波も受けました。現在、下野谷遺跡に隣接する東伏見稲荷神社には、中島飛行機武蔵製作所で被災した人々の慰霊碑があります。

戦後は、市域がベッドタウンとしての発展を遂げる中、石神井川やみどりに恵まれた、早稲田大学や東伏見小学校などのある文教地区として急速に宅地化が進みました。そうした中、市民による下野谷遺跡の保存運動の機運が高まり、平成19(2007)年には、下野谷遺跡公園が開園し、市の歴史を感じる文化とみどりの憩いの場となっています。

(2) 周辺の遺跡

◇下野谷遺跡周辺の遺跡—富士見池遺跡群

下野谷遺跡が立地する武蔵野台地では、水が豊富に湧く地点がいくつかあり、それを源流に中小河川が流れています。そういった湧水地点には旧石器、縄文時代を中心とした遺跡群が形成されていることが多く、その中には、河川流域の拠点となる大集落遺跡が含まれています。下野谷遺跡周辺では、下野谷遺跡の東側境界に接する練馬区の富士見池周辺に遺跡群が形成され、西東京市域には下野谷遺跡、練馬区側には富士見池遺跡群と呼ばれる、旧石器時代・縄文時代を中心とするいくつもの遺跡が連なります。

史跡整備には、これらの周辺遺跡との関係を示す工夫が求められます。

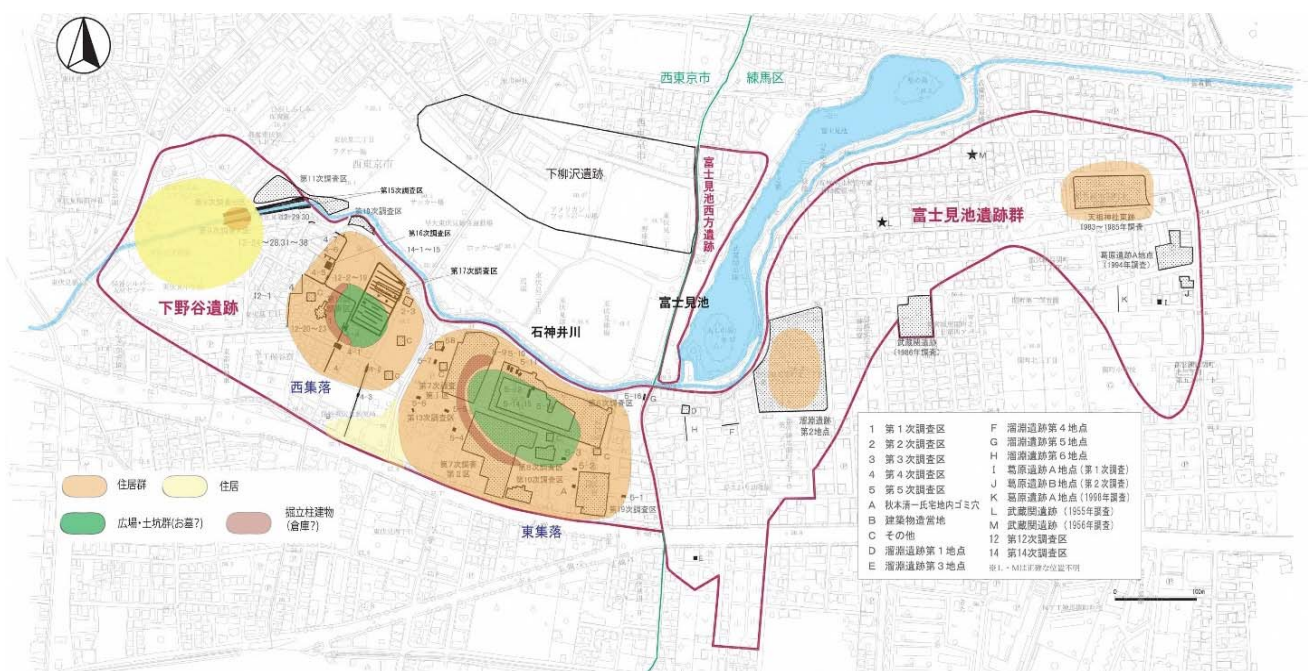


図10 下野谷遺跡と周辺の遺跡

◇石神井川流域に密集する遺跡（旧石器時代～近世）

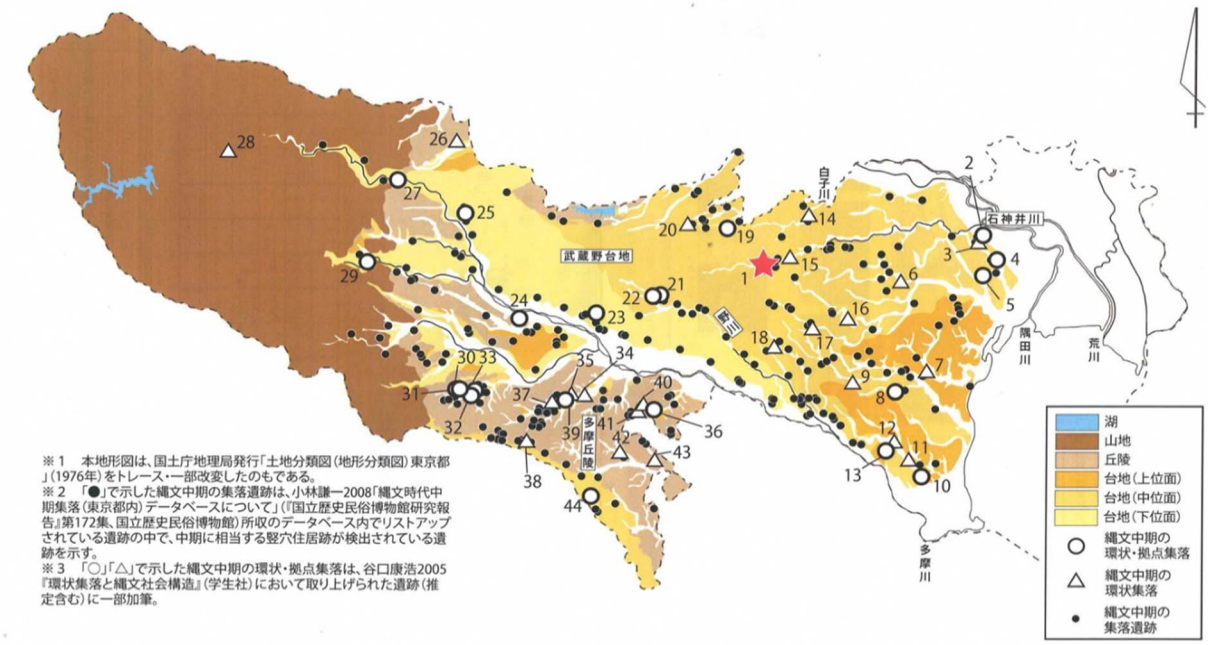
下野谷遺跡で、旧石器時代、縄文時代の遺構や遺物が多く見つかるのも、豊かな水の恩恵と考えられます。下野谷遺跡の北を流れる石神井川流域は、国内でも有数の遺跡密集地帯であり、河川沿いに遺跡が分布しています。そういった多くの遺跡、特に縄文時代中期の集落の拠点遺跡として重要な役割を担っていたのが下野谷遺跡です。

石神井川の流域には小平市鈴木遺跡など旧石器時代の遺跡も多く分布しています。西東京市域にも下野谷遺跡の調査で先駆的な役割を果たした瀧澤浩氏により、日本の旧石器時代研究の最初期、昭和31（1956）年に発見された坂下遺跡があり、下流には南関東で最初に発見、調査された板橋区茂呂遺跡など多くの遺跡が連なります。

旧石器時代の遺跡と同様に縄文時代の遺跡も連綿と残されています。住居跡の残るいわゆる集落遺跡は、下野谷遺跡より上流からは発見されていませんが、川を下れば縄文時代中期の集落跡である練馬区扇山遺跡、その対岸には城山遺跡があります。その先には、石神井台遺跡がある三宝寺池、池淵遺跡、堀北遺跡、中村橋遺跡など縄文時代中期の遺跡があります。さらに下流でも、遺跡が連綿と続き、貝蒸し遺構などが発見されている北区中里貝塚などが立地する東京低地に達します。

◇武蔵野台地の縄文時代中期の集落遺跡

武蔵野台地には、河川流域を中心に縄文時代集落が多数分布しており、それぞれの河川に拠点的な環状集落が残されています。下野谷遺跡は石神井川沿いの遺跡群の拠点となる集落であり、武蔵野台地では最大、南関東地方でも最大級の規模を誇る集落遺跡です。



- 1: 下野谷遺跡、2: 御殿前遺跡、3: 七社神社前遺跡、4: 動坂・神明町貝塚、5: 小石川植物園内遺跡、6: 落合遺跡、7: 鶯谷遺跡、8: 明治薬科大遺跡、9: 桜木遺跡、10: 千鳥窪遺跡、11: 雪ヶ谷貝塚、12: 諏訪山遺跡、13: 奥沢台遺跡、14: 八ヶ谷戸遺跡、15: 扇山遺跡、16: 松ノ木遺跡、17: 下高井戸塚山遺跡、18: 三鷹五中遺跡、19: 自由学園南遺跡、20: 新山遺跡、21: 恋ヶ窪東遺跡、22: 恋ヶ窪西遺跡、23: 向郷遺跡、24: セツ塚遺跡、25: 山根坂上遺跡・羽ヶ田上遺跡、26: 丸山遺跡、27: 駒木野遺跡、28: 下野原遺跡、29: 留原遺跡、30: 神谷原遺跡、31: 宇津木台遺跡D地区、32: 滑坂遺跡、33: 小比企向原遺跡、34: TNTNo.67遺跡、35: TNTNo.446遺跡、36: TNTNo.72・796遺跡、37: TNTNo.107遺跡、38: TNTNo.939遺跡、39: TNTNo.471遺跡、40: TNTNo.520遺跡、41: TNTNo.46遺跡、42: 野津田上の原遺跡、43: 鶴川遺跡J地点、44: 忠生遺跡群（A・B）

出典：『国史跡下野谷遺跡（リーフレット）』（作図：大綱信良）

図 11 武蔵野台地の縄文時代中期の集落遺跡と環状集落

3. 社会的環境

西東京市域の大部分は昭和の時代まで、都心に近い農村地帯でしたが、道路整備や電車をはじめとする交通機関の整備によって都心へのアクセスが向上し、都市化の進展と住宅開発により住宅都市として発展してきました。また、近年では、大きな工場の撤退が続く一方で、駅周辺や街道筋などを中心に高層マンションや分譲住宅などが建設されており、農村景観は一変しました。

(1) 人口

平成 31 (2019) 年 1 月 1 日現在の住民基本台帳によると、本市の総人口は 202,817 人、世帯数は 97,350 世帯です。面積は東京都内の 26 市の中で 15 番目の大きさですが、人口密度は 2 番目[※]と高く、比較的狭い土地に多くの住民が居住していることが特徴的です。

本市の人口の推移としては、「西東京市人口推計調査報告書(平成 29 (2017) 年 11 月)」では、平成 34 (2022) 年の 202,532 人まで増加し、その後、ゆるやかに減少すると推計されています。

推計の基準年(平成 29 (2017) 年)から 10 年後の平成 39 (2027) 年には 201,497 人と基準年をやや上回るものの、20 年後の平成 49 (2037) 年には 196,516 人となり、基準年を下回ります。また、平成 34 (2022) 年以降、市の人口が減少する中、老年人口(65 歳以上の人口)は一貫して増加し、高齢化率(総人口に対する老年人口の割合)は、平成 29 (2017) 年の 23.7%から、平成 39 (2027) 年には 25.6%、平成 49 (2037) 年には 31.0%になると見込まれています。

なお、史跡が所在する東伏見地区(東伏見一丁目～六丁目)の人口は 5,141 人、世帯数は 2,750 世帯です(外国人を含めた集計、平成 31 (2019) 年 1 月 1 日現在)。

※(出典) 東京市町村自治調査会「多摩地域データブック～多摩地域主要統計表～2017
(平成 29 年版)」平成 30 (2018) 年 3 月

(2) 交通

下野谷遺跡は、西武新宿線の東伏見駅(新宿から約 30 分)から徒歩約 7 分の距離にあります。遺跡の南側は青梅街道に面しており、西側には調布保谷線が通っています。これらの道には JR 中央線吉祥寺駅、三鷹駅からの公共バスと市コミュニティバス「はなバス」の停留所があります。

広域アクセスには恵まれていますが、史跡周辺の道路には大型バスは入ることができず、また駐車場がない状況となっています。

(3) 周辺の主な文化財

下野谷遺跡の周辺には、氷川神社、東伏見稻荷神社をはじめとした文化財が点在しており、これらの一体的な活用を検討していく必要があります。



図 12 史跡周辺の主な文化財

(4) 周辺の文化的要素

周辺地域は、小学校や大学などがある文教地区です。また、西武柳沢駅前には柳沢公民館・柳沢図書館があり、学校教育や社会教育との連携が重要となる地域です。

(5) 史跡に関連する団体等

現在の下野谷遺跡公園を整備する際に結成された「下野谷遺跡保存協議会」をはじめとした協力団体とともに、駅周辺の商店会など地元の協力も得ながら活用事業を実施しています。

毎年、秋に下野谷遺跡公園で行っている「縄文の森の秋まつり」は、これら協力団体の力で運営されており、今後のさらなる活用を考える上でも貴重な存在となっています。